

「資料紹介」奈良の戦後雑誌（1）  
『大和文学』の目次と主要記事解説

中嶋 優 隆・光 石 亜由美

要 旨

雑誌『大和文学』は、一九四七（昭和22）年から翌年にかけて発刊された文芸雑誌である。出版社は、奈良・丹波市町（現天理市）に所在する養徳社で、田中克己、保田與重郎、前川佐美雄ら大和文学会のメンバーが編集を担当した。地方雑誌であるが、戦後の文化活動の一翼を担った雑誌である。『大和文学』について、雑誌の概要、目次の細目、主要記事の解説（著者略歴、記事の一部抜粋、解説）を行った。

キーワード：①『大和文学』、②戦後雑誌、③養徳社、④保田與十郎、⑤池田小菊

「資料紹介」奈良の戦後雑誌について

メリーランド大学蔵のプランゲ文庫によれば、戦後、奈良県で発行された雑誌は八四誌にのぼる。文芸雑誌、教育雑誌、同人誌などその

内容はさまざまであるが、戦後の奈良の文化的、文学的土壌の豊かさを物語るものである。この資料紹介では、奈良大学図書館に所蔵されている雑誌を中心に、それらの資料のなかからいくつかを継続的に紹介したい。

まず、一では雑誌の概要説明、二では編集者、発行所など雑誌の基本的な情報、目次の細目、三では主要記事の解説を行った。主要記事の解説は、奈良にゆかりの深い人物の記事、特徴ある記事などを選択して紹介している。

なお、目次の入力・作成は、中嶋優隆が行い、主要記事の解説は中嶋と光石が分担しておこなった。解説の最後に担当者を明記している。

一 『大和文学』について

『大和文学』は、一九四七（昭和22）年一二月から翌年一〇月にかけて、養徳社から出版された文芸雑誌である。創刊号から第三集まで確

認されている。

養徳社は、一九四四（昭和19）年に、出版社の整理統合の波をうけて、天理時報社出版部、甲鳥書林、六甲書房、朱雀書林、古書通信社が合併して誕生した人文科学系の出版社である（『創設のころ 養徳社創立六十年』（図書出版・養徳社発行、二〇〇六〔平18〕、非売品）参照。なお、同冊子は養徳社ホームページで閲覧可能）。奈良県丹波市町川原城（現・奈良県天理市）に現在も所在する。奈良ホテルで開かれた設立記念会には、当時鎌倉に住んでいた川端康成もやってきて祝辞を述べたという。戦争末期、出版事情が悪化するなか書籍の刊行を続け、敗戦後も、一九四五（昭和20）年一〇月から一九四七（昭和22）年九月まで、養徳社から出版された本は七〇点にのぼる。その筆者の顔ぶれを見てみると、川端康成、横光利一、佐藤春夫、亀井勝一郎ら文壇の中心人物ばかりである。戦後の紙不足のなか、比較的潤沢な用紙を持っていた養徳社は、カストリ雑誌などの粗悪な雑誌があふれる戦後の出版状況において、紙質、内容とも良質の本を出版していた。奈良に所在するが、全国の文化的活動を支えた出版社であるといえよう。

『大和文学』の母体は大和文学会である。大和文学会は、戦後復興の流れのなか、日本文化の起点として奈良を位置づけ、地方色豊かな文化を全国に発信しようという目的で集まった文学者団体だ。編集委員には田中克己、保田與重郎、前川佐美雄、瀧井芳次、吉岡武雄の名前があがっている。養徳社内「大和文学編集部」を設けている。雑誌

の編集者は第一集が、大和文学会、天理図書館内・瀧井芳次となっている。第二・三集は東井三代次である。

誌面は、随筆・小説・詩・短歌・和歌・座談会などで構成されている。また投稿規定を設け、投稿も募っている。

なお、『大和文学』についての詳細な解説については、二〇二二年六月刊行予定の『占領期地方雑誌事典』（金沢文圃閣）の『大和文学』の項目（執筆者・中嶋優隆）を参照してもらいたい。

#### 〈凡例〉

- ・引用に際して漢字は新字体に改めた。
- ・目次は雑誌の目次頁を採録した。本文と相違がある場合は注記した。
- ・目次の「↓（○）」の番号は、「三 主要記事の解説」の番号に対応している。

## 二 目次

第一集（創刊号）一九四七（昭和22）年二月一日発行



【写真①】  
『大和文学』第1集 表紙

編集者 大和文学会 奈良県丹波市町袖ノ内  
天理図書館内 瀧井芳次

発行所 株式会社 養徳社 本社 奈良県丹波市町川原城  
京都市中京区蛸薬師室町西入

発行者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城

印刷製本者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 130頁

定価 45円

表紙 三原実

## 目次

保田與重郎「みやらびあはれ」（4） ↓ 〈1〉

## 注

（1）本文では「近作」という副題がついている。

鈴木治「スタンダール」（78） ↓ 〈2〉

釈道空「飛鳥をおもふ」（30） ↓ 〈3〉

神西清「軽の蓮池」（39） ↓ 〈3〉

詩 田中克己「不可知」（46）

歌 前川佐美雄「砂丘」（46）

句 阿波野青畝「秋」<sup>①</sup>（66）

松本梢重「天平写経生のなりはひ」（68）

中村幸彦「諸を食つた話」（71）

吉村正一郎「短歌と空想」<sup>②</sup>（56）

池田小菊「生ぬるい青春」（51） ↓ 〈4〉

服部正己「伝統について

——ニーベルゲンとゲーテ——」（48）

椿伴夫「冬彼岸」（62）

長沖一「朱ら引く」（113） ↓ 〈5〉

上司小剣「絶筆」（122） ↓ 〈6〉

こんと・ぱりえて（27）

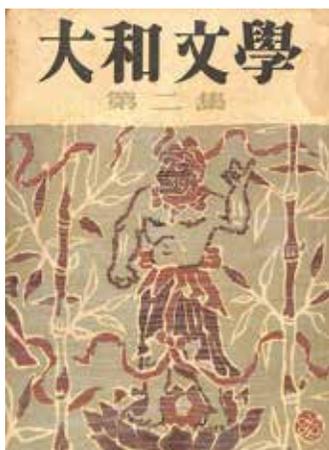
投稿選評（短歌・詩・俳句）<sup>③</sup>（124）

編集後記（129）

投稿規定（130）

- (2) 本文では「或る歌会での談話」という副題がついている。  
 (3) 投稿選評の短歌の選者は吉井勇、詩の選者は田中克己、俳句の選者は阿波野青畝である。

第二集 一九四八(昭和23)年七月一五日発行



【写真②】  
『大和文学』第2集 表紙

編集兼発行者 東井三代次 奈良県丹波市町三島  
 発行所 株式会社 養徳社 本社 奈良県丹波市町川原城  
 支社 京都市中京区蛸薬師通西入  
 印刷製本者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社  
 頁数 128頁  
 定価 70円  
 表紙 三原実

目次

注

- (1) 本文には「社会調和の感覚について」という副題がついている。  
 (2) 本文には「陶磁の美学」という副題がついている。

- フィードルディング／阿部知二  
 「英雄ジョン・ワイルド」(4)  
 新井トシ「切支丹と大和」(45)  
 詩 鎌谷嘉道「老いたるわれをして――」(50)  
 吉村正一郎「日本歴史の挿絵」(52)  
 保田與重郎「生写」(56) ↓(7)  
 歌 吉田恵弘「斑鳩の里」(70)  
 鈴木治「浪漫主義の世界」(72)  
 富永牧太「ちがった世界」(89)  
 田中克己「おしやべり」(93)  
 池田小菊「女と煙草」(104) ↓(8)  
 リラダン 浅見篤「人間になりたい願ひ」(119)  
 投稿規定 (103)  
 編集後記 (128)

第三集 一九四八（昭和23）年一〇月二五日発行



【写真③】  
『大和文学』第3集 表紙

編輯発行者 東井三代次 奈良県丹波市町川原城

発行所 株式会社 養徳社 本社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師通室町西入

製本者 昭栄堂製本所 京都市榎木町千本東入

印刷者 真美印刷所 京都市上樫木町千本東入

頁数 102頁

定価 90円

備考 目次に「MCMXLIII 大和文学 第三輯」とあり。

目次

宗教と文学（特輯）

吉野清人「実存の諸相」（3）

赤岩栄「聖書と文学」（12）

保田與重郎「宗教と文学の立場」（20）↓（9）

諸井慶徳「ロゴスとパトス」（30）

横田俊一「ゲヘナの罪人」（38）

随筆<sup>③</sup> 野村秀子（45）・緒方準一（45）・高柳章（47）

松田正柏（48）・松江玉翠（49）

翻訳 レッシング・山口繁雄訳「幽霊について」（55）<sup>④</sup>

評論 寺尾勇「憑かれたる青春」（63）<sup>⑤</sup>

評論 原健忠「ヘッセと戦争」（66）<sup>⑥</sup><sup>⑦</sup>

金井寅之助「益軒の大和紀行（史料）」（69）

絵と文 小野藤一郎「高畑の夢」（51）

奥田勝「美の秘密」（59）

短歌<sup>⑧</sup> 前川佐美雄（60）

俳句<sup>⑨</sup> 橋本多佳子（48）

詩 大上敬義（83）

座談会「大和の文化」出席者 保田・前川・田中・

中山・吉村・富永（74）↓（10）

創作 関地耕三郎「葬送曲（投稿）」（85）

投稿規定（101）

#### 注

（1）本文には「文学は宗教的人間の告白である」という副題がついている。

（2）本文には「太宰文学論」という副題がついている。

（3）本文に記載されたそれぞれの随筆のタイトルは以下のとおり。野村秀子「春日野」、緒方準一「手水鉢」、高柳章「さまざまなる意匠」、松田正柏

「旅して想ふ」、松江玉翠「魂にふれるもの」。

- (4) 本文には「ハンブルグ演劇論」より」という副題がついている。
- (5) 本文には「学生論序説」という副題がついている。
- (6) 本文には「若し戦争がもう二年永びいたら」という副題がついている。
- (7) 本文の頁は、52頁。
- (8) 本文には「鳥取抄」という副題がついている。
- (9) 本文には「秋風に」という題目がついている。

### 三 主要記事の解説

#### 〈1〉保田與重郎「みやらびあはれ」

##### 著者略歴

文芸評論家。奈良県生まれ。一九一〇（明治43年）四月一五日〜一九八一（昭和56）年一〇月四日。湯原冬美の名も用いている。父槌三郎、母保栄。保田家は林業を生業とした。地元の畝傍中学校を卒業後、旧制大阪高等学校、東京帝国大学文学部美学美術史学科に進学。高校時代の同級生に竹内好がいる。在学中から短歌や文芸評論を発表。一時、マルクス主義に関心を寄せるが、のちにドイツ・ロマン派に傾倒し、『コギト』や『日本浪漫派』の創刊同人として活躍した。一九二四〔大正13〕年一月に保田や亀井勝一郎ほか六名の署名のもとで発表された『日本浪漫派』広告（『コギト』第三十号）は、当時の文壇に旋風を巻き起こし、佐藤春夫や太宰治らを巻き込んだ時代の一潮流をつくった。

#### 記事の一部抜粋

今日の思ひを述べる迄に、私は一年の文筆上の空白の生活と、一年の戦場の生活と、一年の農耕の生活を経てきたのである。しかもこの三年に亘る無筆の生活の間に、一步二歩は自然の世界に近づいたやうに思はれる。天上と地下を、縦横無礙に往来し、瞬時に昇降しつゝ、この世の行為に於て、かゝる神の上下する道を定め、そこに人倫の根底を支へるのは、詩人文人の使命に他ならぬのである。さういふ天地を貫く橋を、天池の柱とうちたてるものは、政治でも経済でも、はた所謂道徳でさへない。もし道徳がみちそのものを云ふ場合に於ても、みちを形に定めるものは、やはり文学の他にないのである。それらすべてが奉仕するみちを、言葉に描き、行為と生活に現れた形に認め定め、さらに示し得るものは、文学と文人である。奈落の生活に於てなほ輝く人倫を、天上の星と競はし得るのは文学である。

#### 解説

保田は一九四六〔昭和21〕年五月の復員後、郷里桜井で農作業に従事した。本作は翌年七月ごろに執筆されたもので、一九四五〔昭和20〕年三月に応召してからの沈黙を破った戦後最初の作品である。のち、戦後の第一評論集『日本に祈る』（祖国社、一九五〇年）に収録された。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして六〇枚ほどで、作品末部には「昭和二十二年七月一日誌す」とある。

表題「みやらびあはれ」の「みやらび」とは、沖繩で「をとめ」を

意味する言葉である。本作中で保田自身は佐藤惣之助の歌の一節から引用したと述べている。しかし谷崎昭夫は典拠となった短歌が芥川龍之介の作で、「佐藤惣之助君琉球風物諸島特集を贈る、ミヤラビは娘子の称なり」という前書きを持つ、「空にみつ大和扇をかざしつつ来よとつけけむミヤラビあはれ」の一句だと明らかにしている（谷崎昭夫『花のなごり—先師 保田與重郎—「みやらびあはれ」註」（新学社、一九九七年）。この異同のほかに、作中では保田が復員した年月などの特定の時期が——後に発表された回想記などでは日時が明確にされているものであっても——曖昧にされたまま想起されたり、永井荷風の『断腸亭日乗』が作家名を伏せられたまま引用されたりしている。このような意図的な忘却が本作品の大きな特徴であるが、その意図については大杉重男「保田与重郎の合言葉—「みやらびあはれ」における暴力の問題—」（『日本文学』第五四卷、二〇〇五年）などに詳しい。

作品冒頭は、保田が応召後に過ごした中国の兵舎で「日本人の誰もか限りなく唱へてきた、これからもさかんとする言葉」の落書きを目撃したことから書き起こされている。ただし、本文を通してこれがどのような言葉だったかは明記されない。この秘められた言葉をめぐって、保田は戦争に導かれた戦前の人民の精神性、詩人らの態度、文学が担うべき価値、情勢に流される言論に対抗する文芸の試みへと論を広げていく。そこに一貫しているのは、詩人や文芸・文学が情勢論的な決定が下される戦後社会において持つべき意義を表明することである。連想的に綴られ、話題が多岐にわたる作品であるが、文芸・文学

の意義や文章論が断片的に論じられていることなど戦後の保田の執筆活動のはじまりとして、重要な意義を持つ作品である。（中嶋優隆）

#### 参考文献

保田與重郎の戦後の執筆活動における「みやらびあはれ」の意義を指摘したものと以下のようなものがある。

・桶谷秀昭『保田與重郎』（新潮社、一九八三年）、『昭和精神史 戦後篇』一第五章 戦後文学と敗戦文学（下）（文藝春秋社、二〇〇〇年）。

#### 〈2〉 釈迢空「飛鳥をおもふ」

#### 著者略歴

詩人、歌人。折口信夫としては民俗学者、国文学国語学者。一八八七（明治20）年二月一日〜一九五三（昭和28）年九月三日。大阪府出身。父秀太朗、母ここう。大阪府第五中学校、国学院大学予科、国学院大学国文科に進学。同大学卒業後、郷土研究を開始し、柳田國男の弟子として「折口学」を大成。代表的著作に歌集『海やまのあひだ』小説『死者の書』など多数。

#### 記事の一部抜粋

私ばかりのことではない。過去千年二千年、大体この路線に沿うたものと想像することの出来る昔の道を、こんな風にして歩き、かう言ふ風に考へながら通つた人々の思ひが、一つだつてこの世に痕をとゞ

めてゐるだらうか。

私もやはり、うなだれて思ひ深さうな外見を持つてゐるかも知れぬが、昔の人は、真に悲しみに沈んで、或は又喜びにほこつて、どうかすると、憤り戦いて、通つたに違ひない。其心が、ほんの断片だけでも日本人の誰の心にも思ひ浮べることが出来なくなつてしまつてゐるではないか。だが、私が今かうして歩いてゐるやうに、思ひつゝ、辿つてゐた昔びとのもの思ひが、ふつと私の想念のひまくに、絡むやうにして隠見する。

### 解説

本作品は、折口が奈良飛鳥の地に遊んだ回想のなかに、四首の歌についての批評を含み込んだ三節立ての随想である。単行本には未収録。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。

一節の枕には

飛鳥川柵わたし堰かませば流れる水ものどかにあらまし

〔『万葉集』巻二・一九七、柿本人麻呂〕

飛鳥川川淀離らず立つ霧の思ひすぐべき恋にあらなに

〔『万葉集』巻三・三三五、山辺宿禰赤人〕

の二首を、二節と三節には以下のそれぞれが置かれている。

みけむかふ南淵山の巖にはふりし斑雪か消え残りたる

〔『万葉集』巻九・一七〇九、柿本人麻呂〕

明日香川ゆき廻む岡の秋萩は今日降る雨に散りかすぎなむ

〔『万葉集』巻八・一五五七、丹比真人国入〕

折口の奈良に対する思いは強く、「第二の故郷」と呼んでおり、また、代表作『死者の書』が奈良県葛城市にある當麻寺の曼陀羅にまつわる中将姫伝説を材としていることは知られている。本作中にも、飛鳥の事物を「洩れなく配置した鳥瞰図を、空でかくことも出来さうに思ふ」とあり、愛着の度を知ることができる。

特に本作品で逍遙の舞台となっているのは、「神南備山」と呼ばれる地域——豊浦寺（現在の向原寺）以南、甘樫丘東側の飛鳥川沿い——である。折口は飛鳥川沿いを歩きつつ、近代化によって忘れ去られてしまった「万葉びと」の「心」へと思いをさせ、先の四首を解釈していく。

たとえば先の二首について、折口いわく、それらは即興歌であり「口から出るに任せてうたひ出し、言ひおさめた歌」のように思われるが、そこには「産まれざる陣痛」に喩えられる思い、「歌をよんで償はれなかつた心の痛み」、つまりは言語化されなかつた思いが包含されており、その思いは「万葉びと」と同じ地を歩むという経験を通して迫ることができるといふ。折口が言上げる土地の風習風俗に根ざした「今の解釈学」は「作者の表現の、そこまで到つて居ない部分までも、解釈の原像に包容して眺める」方法、すなわち「陣痛」を言語化する術を確立した。この「今の解釈学」なるものを試みたのが本作品の主眼だといえよう。

なお本文末部では、「表現不足な歌」が目立つ「万葉集」の存在理由

を否定することについて「まじめに考へると、日本の運命の象徴のやうに感ぜられ」と述べられており、言語の表現可能性と政治的断定とを重ねる問題意識を見て取ることができる。（中嶋優隆）

### 〈3〉神西清「軽の蓮池」

#### 著者略歴

小説家、評論家、翻訳家。東京都生まれ。一九〇三（明治36）年一月一日～一九五七（昭和32）三月一日。父親が内務省の官吏であったため幼少期は各地を転々とする。一九一六（大正5）年、東京府立第四中学校に入学。一九二〇（大正9）年、建築を志し、第一高等学校理科に入学。フランス語を独学。一九二八年東京外国語大学ロシア語科を卒業。ソ連通商部勤務などに勤務するかたわら、文筆生活を行う。チェーホフ「ワーニャ伯父さん」などロシア文学やフランス文学の翻訳を手がける。代表作は、小説「灰色の眼の女」「少年」や評論「詩と小説のあひだ」など。

#### 記事の一部抜粋

ついこんな題をつけてしまったが、今の大軽のあたりには、近くにあやめ池の古墳はあつても、蓮池はおそらくないであらう。けれど私はいま無性に軽の蓮池の話したいのである。これは何か魔物にでも取憑かれたのかも知れないが、とにかくかうして眼をつぶつてみると、あの軽の丘の片かけに今では埋まつてしまつてゐる池の姿があ

りありと浮かびだし、その水面に紅や青や白の蓮の花がうつとりと首をかしげてゐる有様が、じつにはつきり見えるのである。その幻想を少しばかり書いてみる。どうせ夢なのだから、そのつもりで読んで頂きたい。……

#### 解説

神西清の随想。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一五枚である。二三日前、机や書簡棚の掃除をしていたら、印度の線香が出て来た。「わたし」は、昔、その線香について記事を書いたことがある。その線香に火をつけてみると、匂いは薄くなっていたが、蓮の花の匂いがした。そこから、古事記、日本書紀、万葉集と蓮の伝来に話が移る。そして、「現在その址すらも不明になつてゐる謂はばすこぶる幻想的な軽ノ池」に咲いていた蓮の花を妄想する。インドでは蓮の花が愛でられ、西洋では蜜の味わいのある果実として憧憬された蓮が、日本にやつてきたとき、蓮の花は仏教の象徴的な文様として様式化され、むしろ、日本人がその「情操生活」のなかに受け入れたのは、蓮の葉（ハチスバ）であった。万葉集でも蓮は劍の池で、軽の池は鴨にちなんだ歌に詠まれるにすぎず、万葉集で蓮を詠った歌は、四千四百九〇首中、四首しかなく、それも、花自体を詠ったものではない。

「軽の蓮池」は、一本の蓮の香の線香から、無性に軽の蓮池のことが話したくなったという冒頭部分から、蓮の伝来、和歌に描かれた蓮の用例を引きながら、古代の軽の池へ思いを飛翔させながら、印度、西

洋、日本での蓮の文化の違いを描いた比較文化論的な随筆である。

なお、神西は一九三九〔昭和14〕五月に堀辰雄と奈良・飛鳥を旅行している。(光石亜由美)

#### 参考文献

・浦西和彦・浅田隆・太田登編『奈良近代文学事典』(和泉書房、一九八九年)

#### 〔4〕池田小菊「生ぬるい青春」

##### 著者略歴

小説家。和歌山県出身。一八九二〔明治25〕年三月一日〜一九六七〔昭和42〕年三月九日。和歌山女子師範学校卒業。一九二一〔大正10〕年、奈良女子高等師範学校訓導に就任する。学校での講演を依頼するため、志賀直哉に会い、以後、師事した。一九二七〔昭和2〕年、教師を辞め、作家生活に専念する。一九三八〔昭和13〕年、志賀との交流をえがいた「奈良」が芥川賞候補となる。一九四七〔昭和22〕年には奈良県民主婦人団体初代会長となり、婦人活動に献身する。代表作は、「帰る日」、「来年の春」など。

#### 記事の一部抜粋

今後の日本にとつて、実用の学が一般に普及されなければならぬことはいふまでもないが、そこで天井につかへるのでなくて、一人々々が背の届かぎり伸び、且つ太ることのできる方向へ道を切りひら

てゆくのでなければ、今よりか優れた学問芸術が日本から生れないことになる。(中略) 私はね。喰べるものがないと言ひながら、肥えて太つてゆく人のことなど小説に書きたいと思はないが、喰べるものことなど少しも言はずに、栄養失調に落ちてゆく人のことを書きたいと思つてゐます。あなたも大いに奮発して下さい――

#### 解説

池田小菊の随筆。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一三枚である。内容は以下のとおりである。文学好きの女子高等師範の生徒が、学校で、科学は実用のためか、「科学のための科学か」という討論があり、「実践されなくても価値のある学問もあり得る」と答えたら、それは象牙の塔の学問だと、周囲から批判されて悔しかったという話を聞いた。

教師である「私」は、この生徒に、学問が現実と結びつかないと文化の発展はないことは当たり前だが、学問によって真理を掴むこと、そうした真理を体現する天才の出現が必要だと説く。天才画家や天才科学者の中には自らの仕事が生徒に理解されずに疲労と失望で自死してしまう人もいるが、その仕事が後代になつて認められることもある。師範学校でも教員になるためだけの実用学だけではだめで、安易に実用一辺倒に陥るなら、師範学校などつぶしてしまつて、一人でも多くの天才の出る、「筋の通つた学校」にしたらよい。

女生徒の悩みに答えながら、安易な実学傾向を批判する随筆である。

その背景には、アジア太平洋戦争に負けた原因には、「御用学者の誤られた実用学」があったと指摘する。一方、二十歳前後の女生徒の心の揺らぎをとらえ、「青春よ！大きく、強く、立てー」とエールを送る部分は、実際に教師であった池田小菊の実感が反映されている。また、戦前戦後と大きく時代が変わったのを背景に、一人一人が伸びてゆくための学問の必要性を論じる部分は、戦後の民主主義教育の影響を感じさせる。

また、奈良女子高等師範学校附属小学校の教師時代、池田小菊は、「合科学習」という新しい教育方法を他の教師たちと実践・模索していた。合科学習とは、子どもの個性や自発性を尊重した大正新教育運動の流れの中で出て来たもので、画一的な教育方法を否定した自律的な学習方法である。独自学習、相互学習によって自己の発展を目的とした。こうした戦前からの池田小菊の教育信念も反映された教育論としても読める随筆である。（光石亜由美）

#### 参考文献

・三ツ石行宏「新教育運動にみる福祉教育の源流 奈良女子高等師範学校附属小学校における池田小菊の「合科学習」に焦点をあてて」『社会問題研究』六〇号、二〇一一年

#### 〈5〉長沖一「朱ら引く」

#### 著者略歴

放送作家。大阪府出身。一九〇四（明治37）年一月三〇日～一九七

六（昭和51）年八月五日。旧制天王寺中学校から、大阪高等学校を経て、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学。在学中、藤沢桓夫、神崎清らの同人雑誌『辻馬車』に参加し、編集も務める。一九三五（昭和10）年、吉本興業に入社し、秋田実らとPR雑誌『ヨシモト』の編集を担当。戦後は帝塚山学院大教授をつとめるかたわら「アチャコ青春手帖」「お父さんはお人好し」など、ラジオドラマの台本を手掛ける。一九七五（昭和50）年には、帝塚山学院短期大学学長となる。小説集に『大阪の女』などがある。

#### 記事の一部抜粋

「隊長どのは、嘘だと思われるかもしれませんが、」／と云つて、ちよつと口ごもつた。それから、私の顔をまつ直ぐに大きな眼で眺めて、／「小森は、まだ、あれを知らないのです。」／そう云つて、急いで、／「ほんとうなんです。遊びに行つたことなんかありません。」／とつけ加えた。／私は、答える言葉がなかつたが、ほのぼのとした気持ちで、紅顔の名残りをとどめている焦げた頬に生毛が吹いたように渦まいているのを見ていた。（中略）やがて、暗い電燈の下の、退屈な夜が来る——と、私は思った。（あれを知らない）小森が、かれの（大人しい、いい女の子）を前にして、（どう取扱つていいかわからないで）、（しよげている）かの女の酌で薄い金魚酒を飲みながら、（別れ話）をするだらう情景を臉に浮べて、私は、ひとり、ほほえんだ。

## 解説

長沖一の随筆。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二二枚である。万葉集の歌の一節から、戦争中の軍隊生活の思い出につながる構成である。内容は以下の通りである。「私」は「朱ら引く肌」という万葉集のある歌の表現が、とても気に入っていた。紅顔の美少年というから、この肌の持ち主は男性だと思っていたら、歌の解釈を読むと、女性であった。この歌を見つけたのは軍隊生活中で、若い軍人たちと生活を共にしていたらから、若い男性の肌だと錯誤したのかもしれない。戦争中、軍人たちは死と隣り合わせの生活を送っていた。また、軍隊というのは年若い少年に「放蕩」を教えるところでもあった。前線に出發する前に兵士たちは女性を買いにゆく。「私」は当時の日記に「焼くその放蕩もまた、かれらにあつては美しい」と記す。敗戦を迎えても、残務処理のため「私」と小森という若い少尉と二人の兵隊が兵舎に残っていた。ある夜、小森は女友達に会いに行くという。小森は童貞で、女性をどう扱っているかわからないと「私」に打ち明ける。小森は九州出身で、その夜は女友達に別れを告げに行くのだった。「朱ら引く」というタイトルは、「朱引 秦不経 雖寐 心異 我不念」(『万葉集』 卷一一・二三九九) という万葉集の歌からとっている。この「朱ら引く肌」の歌は、美しい女性の肌に触れないで今夜は独りで寝るが、私の心には変わりはないという女性の恋人への恋心を歌った歌である。この随筆「朱ら引く」では、女性の肌を、若い男性の肌と誤解し、さらに、部下の小森という兵士と、その女友達の奥手な恋

の回想に結び付けてゆくものである。

戦中戦後の軍隊生活の回想が中心となるこの随筆は、特に軍隊において買春がどのような位置づけとしてあったのかを垣間見せてくれるものである。まず戦争中は、「中学を出るか出ないかの少年」が夜ごとに「からだを汚し」に売春女性のもとに通い、売春女性も通いつめた兵士の無事を祈るために「断もの」をする美談について語られている部分がある。戦地では慰安所、内地では遊廓などの売春地帯が、軍隊生活とセットであり、若い兵士にとって買春は、軍隊内の通過儀礼として、もしくは前線の送られる直前の精神的な不安を解消する手段として、「墮落」「からだを汚す」行為であるが、必要悪として存在していたことがわかる。軍隊が買春体験を媒介としてホモソーシャルな関係性を構築している集団であることが透けて見える。

そんななか小森は「遊びに行つたことなんか無い」、つまり女性を知らない「紅顔」の若い兵士である。うぶな小森と、気さくで大人しい女友達の別れの夜を想像するところで終わるこの随筆は、「朱ら引く肌」の持ち主である未経験者・小森に対して、上官である「私」のうつつらとした優越感が感じられる。(光石亜由美)

## 〈6〉上司小剣「絶筆」

## 著者略歴

小説家。奈良県生まれ。一九七四(明治7)年二月一日〜一九四七(昭和22)年九月二日。本名延貴(のぶたか)。父延美は撰津多田

神社の宮司、母は幸生（こう）。地元の小学校を卒業後、大阪予備学校で学んだ。一八九七〔明治30〕年、上京し読売新聞社に入社。明治四十年代より小説を書き始める。一九一四〔大正3〕年、『ホトトギス』に発表した短編「鱧の皮」によって作家的地位を確立。出身地である京阪地方の風物を描いた作品が多い。また、自然主義文学者や社会主義関係者との交友も多く、幸徳秋水らを実名で登場させた「平和主義者」などもある。代表作は「父の婚礼」「東京」「U新聞年代記」など。

#### 記事の一部抜粋

平田正秀は、奈良のある神社のお廊で生まれて、そこに育つた。社といふこの国特有の、不自然ともいふべき異様なほひを身に着けて十四の春を迎へたのであつた。もちろんそのころは、神社といふものの体制が、確立して居らず、『国家の祭祀』などといふ言葉も、その道の学者の手で創られてゐなかつたので、神社はさながら、神職の私有物のごとく、若干の氏子があつて、その総代といふもの二三人が、何かにつけて干渉はしたが、しかし、財政的にはあまり深入りせず、毎日あがる賽銭は賽銭箱からすぐに、正秀の家——と言つても、神社の楼門に隣接したお廊——の財布に移されて、生活費に使用された。遊覧地のことで、春日から二月堂、大仏へ、またその逆のコースをとる人々が、かならず正秀の神社の狭い境内を通るので、画工の刷毛ついでともいふべき参詣者の投げ込んで行く穴あき銭や銅貨が、春秋の晴天には三円ぐらゐあつた。三円といへば、そのころは相当の金額で

あつた。

#### 解説

上司小剣の絶筆となつた小説。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約三・五枚である。最後に「附記」がつけられており、「上司小剣先生はこの稿を八月三十日の朝のうちに書きになり、翌三十一日は執筆を休まれ、その夜に入りて、御発病、医薬の効なくつひに九月二日午前一時十三分脳溢血のために永眠なされ、御誌へのこの稿が絶筆となりました。／＼と安部宙之介氏から御便りがあつた」とある。未完の作品で、タイトルはつけられていなかったようで、編者が「絶筆」と題して掲載したとある。

上司小剣は奈良県生まれの小説家で、一八九七〔明治30〕年、堺利彦のすすめで上京し読売新聞社に勤める。以後、東京に在住した。晩年は歴史小説を執筆していたが、一九四七〔昭和22〕年九月二日、大田区北千束町の家で息を引き取る。享年七四歳、多磨霊園に埋葬された。九月中に執筆途中であつた原稿が、同年一二月発行の『大和文学』に絶筆として掲載されたのは「附記」の通りである。

「平田正秀は、奈良のある神社のお廊で生まれて、そこに育つた」と始まる「絶筆」は、晩年、上司が好んで描いた歴史小説の系統につながるものである。神社の場所は明記されていないが、「遊覧地のことで、春日から二月堂、大仏へ、またその逆のコースをとる人々が、かならず正秀の神社の狭い境内を通るので」とある。上司の父親・延美

は、奈良の手向け山八幡宮の神主の次男であったが、次男であったため、摂津の多田神社の宮司となっている。「絶筆」には「正國やそのすぐの弟の大阪の方の、これも或る神社の神職の家へ養子に行つてゐる正義」とある。正國は正秀の腹違いの兄であり、大阪に養子に行つた正義というのが、上司の父親であろう。おそらく、父親の腹違いの弟をモデルに、手向山神社を舞台にした小説を書こうとしていたと推測される。

小説の時期は、維新前後であるが、「神社といふこの国特有の、不自然ともいふべき異様なほひ」ももちろんそのころは、神社といふものの体制が、確立して居らず、『国家の祭祀』などといふ言葉も、その道の学者の手で創られてゐなかつたので「などという一説からは、敗戦直後、GHQによる検閲を意識し、戦前の国家神道のことさら批判的に説明していると思われる。」(光石亜由美)

#### 〈7〉保田與重郎「生写」

##### 著者略歴

省略。(1)の略歴を参照。

##### 記事の一部抜粋

近代の写生思想が、人間復興以後の発想をもつのは当然のことである。自然に支配的に臨まうとする思想は、近代の特色である。四面より支配されてゐるといふ考へ方に対する反動的な発想は、あまりにも

露骨に近代思想を彩つてゐる。自然を支配するといふ考へ方は、一応自然のやうに聞える。しかし林野を拓き、地の高低を平し、水路を通じた人々は、決して自然を支配すると考へてゐなかつたのである。人間の名に於て、前代の支配権を己のものとなさんと考へた。つまり支配権の一切を抹殺すべき日に、一人にあつた支配権が多数に分配せられたのである。この考へ方は反動である。進歩ではない。支配権や所有権といふ点では、十九世紀に考へ方の上で何の進歩もなかつたのである。自然を支配するといふ思想は、封建時代に対する反動の一つの派生的な現れにすぎない。(中略) 支配するといふ考へ方が正義でないのである。

##### 解説

本作品は四節立ての随想である。『冰魂記』(白川書院、一九七八年)に収録。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約三五枚である。

タイトルは「生写」(本文では「生うつし」とされているが、本文中で「生うつし」が江戸時代の本草学との関係で論じられるのは最後の四節のみで、ほかの三節ではアララギ派の写生論に対する批判と、自然に対する保田独自の「観察」態度が表明されている。アララギ派と自身の相違点については戦前から言及してきた保田だが、本作品はそれらに復員後の農耕経験を加味したものである。

保田は特に島木赤彦の写生論を批判している。同趣旨の批判は『赤彦断想』などにも見ることができ、保田いわく、赤彦の思想は自然

を支配しようとする「霸道」であり、それは「近代人の悲劇」である。対して、保田は「自然に仕へてゆかうとした、敬虔な東洋の抽象画の思想をよるこぶ」と述べ、狩野永徳、狩野探幽、酒井抱一、柳里恭（淇園）を高く評価する。そして、抱一および里恭と芭蕉の「軽み」の思想——保田いわく「軽み」とは、「貫道するものの自然と天造を信じたが、また貫道の自然に寄与する機能を、文学として定めた」ものである——とを通底したものと理解することで、東洋画的写生と、保田が高唱する言語的写生を「自然に仕へ」る写生として重ね合わせていく。もし、「軽み」を失せば「霸道」としての写生に堕してしまうというのが保田の見立てである。

この主張が本作品の半ばで、保田の戦後生活と結び付けられる。保田は農作業従事の経験を通して「霸道」に堕さない写生のあり方に気づいたと述べ、特に正岡子規が排した芭蕉の「教訓的理想的な作」である「青くてもあるべきものを唐辛子」の一句に注目する。「その句のもつてゐる水々しさは、実際に農耕をなした者でなくては感受し得ず、この句のように芭蕉の「教訓的理想的な作」のなかには「架空の教訓でなく、実物の実感であり、勤労と作業の直接体験であつて、一種の安堵と歓喜を与へ、しかも失意と逆境に絶大の自信を与へるものがある」り、いわゆる名句は「病床の人、書斎の人」が経験し得ない「即物と実感と印象」を経験させると述べている。

以上、保田が主張してきた写生論と戦後の経験を併せたところに作者の変遷と一貫した姿勢を見て取れる作品である。また、四節で論じ

られる本草学の成立過程に「生うつし」の成立を重ねる手つきは近世文学史および学問史として興味深い。（中嶋優隆）

#### （8）池田小菊「女と煙草」

##### 著者紹介

省略。（4）の略歴を参照。

##### 記事の一部抜粋

また、だいたい、お淳は、今は厚かましくなつてしまつたけれど、こゝまで来るのに、自分の煙草を少し卑下しすぎ、女の煙草について、必要以上に卑屈な考へを持ち、煙草や酒を自身の身の疵にしすぎて来た気がしてゐた。そして、この卑屈さといふのは、昔自分が教員をして、感化とか、影響とか、責任とか、さういつた、いやにどつしりと重い倫理の袋を、余儀なく背負つて暮した、その当時に養成された、それは一種のひがみ根性だと考へたことがあつた。今はそればかりだとも思つてゐない。（中略）自分だつて、多嘉子だつて、師範教育なんか受けずに、最初からもつとちがつた出方をして、自分らしい生き方だけを目当てにフリーで来た身なら、一本のたばこをこんなに身の疵にしたりするものか、チャンチャラ可笑しいよ。意外なところまで大きく発展させて、一本のたばこが大問題のやうに腹が立つたものがある。

## 解説

短篇小説。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約三九枚である。お淳という中年の作家を視点人物として、作家志望の女性たちと煙草をめぐるエピソードを中心に構成されている。お淳が女子師範学校の教員という設定であり、美津という女性は、池田小菊の随筆「生ぬるい青春」(主要記事の解説(4))に出てくる教え子に設定が類似していることから、自分をモデルにした私小説といえるだろう。

お淳が、美津という二十一歳の作家志望の女性の原稿の添削をしていると、自分をモデルにした小説の一部に、夜、家族が寝静まったあと、煙草を吸っている、という場面が出てきた。美津は良家の「お嬢さん」で、ご両親がそのことを知ったら、娘が小説を書くことを一層警戒するだろうとお淳は心配する。同じく、お淳のもとに原稿を見せに来る多嘉子という三十歳の女性もいて、彼女も隠れて煙草を吸っているらしかった。お淳は教員で、三十七歳までは人前では煙草を吸わなかったが、今は酒も、煙草もたしなむ。しかし、若い女性が煙草を吸うことについては複雑な心境だ。

タイトルどおり、女性と煙草をめぐる小説だが、そこには女性と自立という大きな問題も隠れている。お淳は、「このごろの女の子も、やはり煙草や酒のやうな、麻酔性の刺戟物を生理的に要求するもので、それは男の子だけの別個な生理でもなさそうだ」「女の故に、一本の煙草も自由に吸へないといふやうな、そんな馬鹿げた倫理があつてよいわけのものでない」というように男性のように女性が煙草を吸うこ

とは、当然の権利だと考える一方、自分は三十七歳まで人前で煙草を吸えなかった。三十歳の多嘉子が煙草を吸うことは許容できるが、二十一歳の美津が吸うことには躊躇する。作中には女性が煙草を吸うことを嫌がる義妹のお安も出てくる。人前で煙草を吸う行為が、男性では問題にされないのに、女性は問題視される。そこには、女性が煙草を吸うことに対する偏見がある。女性が煙草を吸うのは、女らしくない、はしたない、もしくは、水商売の女性が専らする行為だ、というイメージがつきまとうからであろう。女性もそうしたイメージを内面化しており、お淳も若い頃は人前で煙草を吸えなかった。

女性にとって煙草とは、単なる嗜好品ではない。人前で煙草を吸うことは、女性として自立した証であり、人の目を気にしない独立心の獲得でもあるだろう。小説では、お淳の眼を通して、女性として成熟してゆく美津の姿も描かれる。物語の後半、お淳は自分の外国煙草を美津に一箱贈呈する。この煙草はお淳が美津を一人の自立した女性として認めた証である。また、作中には「自分らしい生き方だけを自分でフリーで来た身なら、一本のたばこをこんなに身の疵にしたりするものか」という一節がある。たかが煙草、されど煙草——女性と煙草をめぐる、ジェンダー規範と女性作家の自立の問題を扱った小品である。(光石亜由美)

(9) 保田與重郎「宗教と文学の立場」

著者略歴

省略。(一)の略歴を参照。

### 記事の一部抜粋

大正中期以降のわれらの文学や宗教の問題も、そのすべてが、国といふものを念頭にしつつ、階級と民族と云ふ二つの異なる観点で考へねばならぬところにあつた。階級のみを考へて足りる者も、国家のみを考へて足りるものも、さらに民族の場合も他人の時は彼らの幸福である。わが同胞の不幸は、わが現実がその一つにひたぶるになることから解決にたどりつき得ないといふところにあつた。二者選一が出来ないのである。されば大正の戦後の近代的文化の運動があへなく潰え、大正末期昭和初期の思想運動が一挙に転向した所以も、すべての因はこゝの現実上の機微にあつたのである。すなはち、それは明治開国以来の宿命的なものであつた。

### 解説

本作品は『大和文学』第三集の特集「宗教と文学」に寄稿された随筆である。同特集にはほかに、古野清人「実存の諸相」、赤岩栄「聖書と文学」、諸井慶徳「ロゴスとパトス」、横田俊一「ゲヘナの罪人」が掲載されている。保田の随筆では神道や日本仏教を含めた宗教とは異なる「神」を信する独自の態度が表明されている。のちに『冰魂記』（白川書院、一九七八年）に「宗教について」に改題され、収録される。分量としては四〇〇字詰め原稿用紙にして約三〇枚である。

本作品のなかで保田は、国際宗教とは異なるアジアの独自の宗教性として「神」を触知するための「道」という理念に論及していく。

「たゞ我々の古の神は、自ら米を作られ自ら機を織られた神であつた。我々の神は覇道の野心のために必要な、合理的な科学的な神ではなく、専ら米作りを典型とする勤労と生産の道に於て、しかもそこで恣意に作られる神ではなく、道のおづからに神を知る」。原始農産体制の模倣的な環境のもとで、その作業に従事することを通して「おのづからに」知られるのが保田のいう「神」である。そして、こうした「神」への「信」は啓蒙的に、あるいは先導的に与えられるもの、すなわち「宗教」としてではなく「道」として信仰されるものであり、また「文学の立場」として——芭蕉のような現実の日常性を放下了した隠遁詩人の態度として——護持されるのだと述べられている。こうした保田の論証に本居宣長の「道」の概念や「延喜式祝詞」の表現が挙げられている。

また、こうした「神」と「道」についての行論のなかで、国際宗教と社会主義思想との間に類縁性を見ている点は興味深い。前者は「民族」を、後者は「階級」といったアプリアオリな観念を前提としており、「日本人であり、アジアの民」である「我々」とっては、どちらかだけを択一することは困難だったために、白樺文学の行き詰まりと社会主義文学の「転向」に結実したというのが、明治大正期の思想史に就いての保田の見立てである。

「宗教」「民族」「階級」など、先天的に与えられる観念に対して、農

業あるいは自然に従事する中で「おのづから」体得される信念を問題にしようとした保田の思想的根幹が垣間見られる一篇である。(中嶋優隆)

### 〈10〉大和文学会座談会「大和の文化」

著者略歴 出席者は以下の六名(五十音順)。

田中克己

詩人、東洋史学者。大阪府生まれ。一九一(明治44)年八月三十一日〜一九九二(平成4)年一月一日。一九三二年に保田與重郎らとともに『コギト』を創刊。その後、同誌、『四季』、『文藝文化』を中心に詩人として活躍。唐詩やハイネの邦訳も行った。代表的著作は詩集に『大陸遠望』『神軍』、評論に『楊貴妃とクレオパトラ』など。

富永牧太

天理図書館館長。大分県生まれ。一九〇二(明治35)年一〇月五日〜一九九六(平成8)年九月五日。父は池田益治。東京の大成中学校、第五高等学校をへて、京都帝国大学文学部独乙文学科に進学。一九二八(昭和3)年に天理教に入信し、富永姓を名乗る。天理図書館などの発展に尽力。天理図書館の機関誌『ピブリア』を中心に論文を発表した。

中山正善

天理教管長。奈良県生まれ。父は中山眞之亮で天理教初代管長。

母はたまへ。一九〇五(明治38)年四月二三日〜一九六七(昭和42)年一月一日。父眞之亮が一九一四(大正3)年に亡くなり、当時一〇歳で管長に就任(なお、幼少であったため正式な就任は一九二五(大正14)年)。旧制天理中学校、旧制大阪高等学校をへて、東京帝国大学文学部宗教学宗教学史学科に進学。天理教原典の『おふでさき』、『おさしづ』、『天理教原典』を刊行し体系化した。

前川佐美雄

歌人。奈良県生まれ。一九〇三(明治36)年二月五日〜一九九〇(平成2)年七月一日。長男の前川佐重郎も歌人として活躍。下淵農林学校をへて、東洋大学倫理学東洋文学科に進学。在学中より佐々木信綱に師事。代表的著作に詩集『植物祭』『日本歌人』『大和』『白鳳』など。

保田與重郎

文芸評論家。奈良県生まれ。一九一〇(明治43年)四月一日〜一九八一(昭和56)年一〇月四日。湯原冬美の名も用いている。父穂三郎、母保栄。保田家は林業を生業とした。地元の旧制畝傍中学校を卒業後、旧制大阪高等学校、東京帝国大学文学部美学美術史学科に進学し美学を専攻した。高校時代の同級生に竹内好がいる。代表的著作に『日本の橋』『後鳥羽院 日本文学の源流と伝統』『萬葉集の精神』など。

吉村正一郎

フランス文学者、文芸評論家、翻訳家。座談会には朝日新聞論説委

員の肩書で参加。滋賀県生まれ。一九〇四（明治37）年二月一七日（一九七七〔昭和52〕年二月九日。父平造はのちの広島市長で胆南の号で政治記者としても活躍、弟は映画監督の吉村公三郎。京都帝国大学文学部仏文学科を卒業後、朝日新聞社に入社。戦後には奈良県教育委員長、帝塚山学園長などを歴任。司会は前半を鈴木治、後半を森忠己が務めた。

### 記事の一部抜粋

戦争中は忠君愛国という一つの秩序があつて、統一されていた。それがなくなつて、今度は新しい秩序を作るわけだが、それを今デモクラシーと言つていて、とりとめがない。何かまとまつて秩序を求める感覚がある。それを求めあこがれる心理がある。ところが現実の社会生活ではこれを満足させるものがないので、古い時代の秩序という感覚にあこがれたりする。（中略）それともう一つ、日本人は自尊心を持つて来たが、戦争に負けて自尊心がなくなつた。しかし日本人も捨てたものでない、よい処があると思いたい。兎も角、自尊心を持つていたい。（中略）そうなると思ひ、現在では対抗できないから、古いものを選ぶ。伝統的な建築とか美術とかに向くという傾向が出来る。概して云えば、逃避的とも云えるでしょうが、一応は魂を休息させたいのだ。（吉村正一郎の発言より引用）

### 解説

『大和文学』第三集で企画された座談会「大和の文化」は、一九四八（昭和23）年六月二三日に天理教会本部内の和楽館にて開かれた。話題は「大和文化」の定義と特徴からその「現代的意義」へと展開し、誌面上では七節——「山中と国中」「山の辺の道」「大和文化の定義」「古代史の影響」「逃避と療養」「巡礼と刊行」「大和文化とパンパン文化」——に分けられている。

座談会の前半は大和の地理を「山中」（山辺郡・吉野・宇陀）と「国中」（現在の天理市周辺の平地）に分けた上で、主たる産業が異なることや現在の大和が足利時代に成立したもので、古代の大和が現在の風俗にどれほどの影響を与えているかが議論されている。この点について座談会のなかで明確な答えはだされていない。このほかにも、大和では農家であっても気品を保つ生活を営んでおり、他の地方文化よりも洗練されたものであるといった主張がなされている。

後半では「大和文化」がパンパン文化へと傾く戦後社会においてもつ役割が検討されている。戦前では、招集された若者が奈良を巡礼したことを例証として、大和への訪問は「古い時代の秩序」への憧憬と「日本人」としての「自尊心」の回復をもたらすという吉村正一郎の発言が軸となつて、全体の議論が展開している。畢竟、大和の地は、「忠君愛国」という秩序が崩壊しパンパン文化が広がった戦後社会からの唯一の「逃避」先、「魂」の「療養」をもたらす「美しい」自然の地としての役割を担うべきとされている。このような座談会の主張は、日本浪漫派の再興とされた大和文学会および『大和文学』の特徴を如実

に表しているといえよう。(中嶋優隆)

**付記** 本稿は、科学研究費助成事業(研究番号16H03336)「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」(基盤研究B) 研究代表者・大原 祐治(千葉大学)の研究成果の一部である。

## Abstract

Postwar Magazines in Nara (I)  
Table of Contents and Main Articles of “Yamato Bungaku”

Yutaka NAKAJIMA, Ayumi MITSUISHI

“Yamato Bungaku” was a literary magazine published in Nara between 1947 and 1948. This article provides an overview of the journal, a detailed table of contents, and commentary on the main articles (author biography, excerpts of articles, and commentary) on “Yamato Bungaku”.

**Key word** : ①Yamato Bungaku, ②postwar magazines, ③Yotoku-sya, ④Yasuda Yojuro,  
⑤Ikeda Kogiku